

初めての尋問を振り返って

会員 安田 愛鈴

1 初めに

昨年の4月に弁護士となることができ、まもなく無事に1年を迎えることができます。振り返るとあっという間の感覚で、いまだに実感が湧きません。その間、日々新しい経験の連続でしたが、その中でも特に強く印象に残っているのが、初めて担当した尋問です。アニメーション制作をめぐる紛争事件で、当初は制作工程や専門用語に馴染みがなく、資料を何度も読み込みながら、少しずつ理解を深めていきました。

そして、この事件は、私にとって「弁護士として初めて法廷に立つ」という忘れがたい機会にもなりました。法廷内で発言をすること自体が初めてであり、それがいきなり尋問であったため、前日の夜からあまり眠ることができず、当日も自分の発言する番が来るまでは、自分の心臓の音がはっきり聞こえるほど緊張していました。ロースクールや司法修習で行った模擬裁判では、尋問の途中で頭が真っ白になってしまうことも多く、その記憶もあって、今回も同じようになってしまうのではないかと不安な気持ちが拭えませんでした。

2 初めての尋問を振り返って

しかしながら、いざ尋問が始まると、ふと視界が開けるような感覚で、先ほどまでの緊張は次第におさまり、目の前のやり取りに集中することができました。事前の想定とは少し異なる展開となる場面もありましたが、準備してきた流れを頭の中で結びつけ、証人の答えに応じて次に何を聞くべきか考えを整理しつつ、何とか最後までやり切ることができました。もちろん決して完璧な出来であったとは言えず、多くの点で

フォローをいただきましたが、尋問を通じて、依頼者のために法廷に立っているという責任の重さを改めて実感する機会となりました。

振り返れば、ロースクールや司法修習で行った模擬裁判では、「うまくやること」がどこか目標になっていたように思います。しかし、実務の尋問では、依頼者の権利や事業に直結する局面を任されているという現実があり、その重さが当日の集中力につながったのだと感じています。

尋問後には、反省点も多く見つかりました。それでも、自分の理解を積み上げ、誠実に準備を重ねたうえで臨んだ経験は、今後の実務家としての成長のための土台になるものだと実感しております。未知の分野であっても、丁寧に向き合い、学び続ける姿勢こそが、弁護士として最も大切なのだと感じた出来事でした。

3 今後に向けて

実務に携わるなかで、自分の成長を実感できる瞬間もありますが、自分にとって新しい課題に直面することも多く、日々学びながら業務を進めております。周囲の方々からいただく示唆に助けられる場面も多々あり、日々の業務の中で、学ぶべき点の多さを痛感しております。まだ1人では力の及ばないところばかりではありますが、いただいた学びを丁寧に積み重ね、いつか支えてくださっている方々の期待に応えられるよう、これからも真摯に、そして謙虚な姿勢を忘れることなく、取り組んでまいりたいと考えております。早く一人前と呼べるような実務家になれるよう、経験させていただいたことを一つ一つ着実に自分の成長へと繋げ、日々研鑽を重ねていく所存です。